

現代日本文学館

12

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 12

正宗白鳥

昭和四十四年五月一日第一刷

著者 正宗白鳥

発行者 桧原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集本文は現代表記にいたしました

目次

正宗白鳥伝 伊藤整 3

塵埃 19

何処へ 25

微光 71

入江のほとり 109

根無し草 133

近松秋江 194

人生恐怖図 260

人生の幸福 357

ダンテについて 377

内村鑑三 391

注解 453

解 年 插
說 譜 画

481 476

桑田雅一「根無し草」
麻田鷹司「近松秋江」
藤城清治「人生恐怖図」
宇野亜喜良「ダンテについて」

正宗白鳥伝

伊藤
整

白鳥正宗忠夫は、いわゆる自然主義作家の一人である。

この流派は、明治四十年前後から大正初期にかけて文壇の主流を形成し、その後長いあいだ自然主義手法という小説のスタイルを日本の文壇に定着させた。しかし事実上は、必ずしも統一された手法を持った作家たちでなかった。だがこの流派と見られた作家を、文壇への出現の順序によって書けば次のとおりである。

「独歩集」によって国木田独歩、明治三十八年（一九

〇五年）七月。

「破戒」によって島崎藤村、明治三十九年三月。

「塵埃」によって正宗白鳥、明治四十年二月。

「南小泉村」によって真山青果、明治四十年五月。

「蒲団」によって田山花袋、明治四十年九月。

「新世帯」によって徳田秋声、明治四十一年十月。

この表によると、正宗白鳥の「塵埃」の出現は田山花袋の「蒲団」より早いことになる。しかし自然主義そのものは、この花袋の「蒲団」によってはじめてその特色が公認され、流派の名を確立したのである。そして、「蒲団」より先に出的「破戒」と「独歩集」とは、そののちに改めて、この流派の先駆的作品と見なされたのである。であるから、正宗白鳥が明治四十年二月の「趣味」に発表した短篇小説「塵埃」が好評を得たとしても、それは必ずしも彼が自然主義直系の作品を世に送り出した、ということにはならない。むしろその次の年なる明治四十一年の一月から四月まで

「早稲田文学」に連載した「何処へ」が、彼を積極的に文壇へ押し出したのであり、かつ彼の最もよい特色を発揮した作品であった。

また、真の意味で自然主義作家であったと言われる徳田秋声が、その真価を発揮したのはもっと遅く、明治四十三年の「足迹」、四十四年の「徴」によると言わねばならぬ。これまた自然主義作家の一人と見られている岩野泡鳴がその筆力を認められたのは、明治四十二年の二月に「新小説」に発表した「耽溺」によってであり、また正宗白鳥に最も近い友人であった近松秋江がその最初の代表作「別れたる妻に送る手紙」を「早稲田文学」に発表したのは、明治四十三年四月である。

だが以上名を挙げた作家たちの中で、正宗白鳥はもっとも若い作家であった。生年順に書くと次のようになる。

明治四年生まれ、田山花袋、徳田秋声、国木田独歩。

明治五年生まれ、島崎藤村。（樋口一葉と同年）

明治六年生まれ、岩野泡鳴。（泉鏡花と同年）

明治九年生まれ、近松秋江。

明治十一年生まれ、真山青果。

明治十二年生まれ、正宗白鳥。（永井荷風と同年）

同じ自然主義作家の中でも独歩と白鳥とでは八歳の隔たりがある。この派の作家たちは、みな小説家として世に出るのは遅く、明治四十年に花袋、秋声、独歩は数え年で三十七歳であり、島崎藤村は三十六歳、泡鳴は三十五歳、秋



白鳥の生まれた家

江は三十四歳、そして最も若い正宗白鳥でも二十九歳であった。その理由は、その前の文壇の主流であった硯友社の美文によって義理人情を描く傾きの小説を、花袋も秋声も巧みに書けなかったからである。この二人は硯友社の中まは周辺にいたにかかわらず世に出られなかった。同年輩の泉鏡花や樋口一葉は明治三十年ごろに名を成したが、花袋や秋声は十年も世に出るのが遅れた。また島崎藤村と若野泡鳴は詩人として名はあったが小説家としてのものを書き出すのが遅く、国木田独步は硯友社風の作品を書く力は全くなく、それまでの考え方では感想文か紀行文のような小説を書いていたため、硯友社時代に認められなかった。

明治三十年代の見方では、彼らは下手な作家であり、またはほかの畑から小説に移った素人であった。素人めいていること、下手であること、野暮なこと、文章が粗末に見えること等が

自然主義作家の特色であった。

そこに「上手」と「下手」ということと、真実と月並ということとの奇妙な結びつきがある。明治四十年における「自然主義」の改革は、巧緻なる文章から粗野なる文章への移り変りであり、作為された美文を棄てて素樸なる真実を掴もうとする動きであり、また虚構のマナリズムを棄てて平板な事実に近いこうとする動きであった。そのような傾向を強く代表するものとして田山花袋の「蒲団」がこの派の象徴的な作品と見なされたのである。

正宗白鳥は作家として、このような特色に合致するところと然らざるところを持っていた。

正宗忠夫は岡山県の産である。後藤亮の詳細な評伝「正宗白鳥」によると、彼は明治十二年（一八七九年）三月三日、岡山県和気郡穂浪村百三十三番屋敷に生まれたとするのが正しいようである。現在そこは備前町穂浪三千百七番地である。瀬戸内海に面した半農半漁の村で、正宗家は亀屋という家号を持って百数十年も続いた旧家である。数代前から子宝に恵まれなかった家で、忠夫の父浦二も、母の美禰も縁つづきの家から来た夫婦養子である。この夫婦の間に長男として忠夫が生まれた。小柄で、病弱で、糲の強い幼児であるが、この「分限者」の家の長男であったため特別大事に育てられた。

忠夫が生まれてからさらに九人もの弟妹が生まれたが、その中からすぐれた人物が何人も出たから、優秀な一族で

あると言わねばならぬ。すなわち次弟の敦夫は国文学に志し、その労作「万葉集総索引」によって知られている。三弟の得三郎は二科会系の洋画家として知られ、その子猪早夫は興業銀行の頭取である。五弟の五男は、丸山家に入り株式会社日本バイプの会長である。六弟の嚴敬は金沢大学教授をした植物学者であり、妹乙未は島崎藤村の発行した女性文芸雑誌「処女地」などに小説を発表したこともあるが、のち東大教授になった辻村太郎に嫁した。

正宗忠夫は五歳のとき村の小学校に入り、その小学校の高等科を終えてから、旧岡山藩の藩校であった閑谷塾に入つて、漢籍、英語、数学を学んだ。そののち若い理想主義のクリスチャンであつた安部磯雄がアメリカ人の宣教師と一緒に岡山に開いた薇陽学院に入り、一年ほど在学した。その間に彼は徳富蘇峰の編輯した雑誌「国民之友」を講読し、また民友社から出た書物に接して、キリスト教の考えに近づいた。また故郷の村の近くの香登にあるキリスト教講義所というのに通つた。

すなわち幼年時代には、彼を溺愛した祖母によって濃厚な仏教の雰囲気の中で育ち、少年時代からはキリスト教の教養を身につけ宗教の雰囲気深くひたりながら成人した。明治二十九年の春、数え年十八歳のとき上京して東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学した。彼は本科に入る資格はあつたが、英語に力を入れるために予科の英語専修科というのに入った。そのころ彼は徳富蘇峰を尊敬してい



祖母得子

て、上京の翌々日に神田の青年会館で蘇峰の演説を聞き、感動した。しかし蘇峰への敬意は間もなく失われた。そのころ正宗忠夫は市ヶ谷の基督教講義所で植村正久の説教を聞き、またこの年の夏帰省の途中に興津で開かれていたキリスト教夏期講習会に加わつて内村鑑三のカーライルについての連続講義を聞いた。正宗忠夫は内村を尊敬した。しかし現実には植村正久に近づいて、その翌年には洗礼を受けることとなった。

正宗は演劇好きな少年であつたが、キリスト教に熱心になつている間、芝居を見ることもはばかられたので、あまり劇場へは近づかなかつた。

明治三十一年、彼は英語専修科を卒業して本科の文学部史学科へ入った。そこで彼は同じ岡山県出身の近松秋江（徳田浩司、明治年代には徳田秋江と号した）と知り合い、



白鳥夫妻 大正2年牛込天神町の自宅

終生の友人関係を持つにいった。正宗は翌年、史学科から文学科に転じて、明治三十四年六月に卒業した。卒業のころには彼はキリスト教への信仰を失い、教会へも行かず、内村の話の聞きに行くこともしなくなった。しかしこの時までの信仰の問題は内に潜んで、生涯つきまとい、その死に臨んでの言動には、信仰のかけが認められた。

東京専門学校を卒業する少し前、明治三十四年の春に、信仰の心が薄らぐのと前後して文学への関心が出て来た。

そのころまでは正宗は文学的な学生よりも倫理的な傾向を持つ学生だと、師の坪内逍遙の目に写っていたらしい。その当時「万朝報」では毎週、ごく短い小説を懸賞で募集していた。一年下級生によくそれに当選するものがあつたの

で、正宗も二三度書いて投稿してみたが一度も当選しなかった。それで彼は、小説は自分の柄でない、と考えていた。だが教授の島村抱月が数名の文学好きの学生を集めて文壇小説の合評をする月曜会なるものを組

織したとき、正宗は徳田秋江などと一緒にそれに加わった。この会で行なう合評は、各自が自分で書いて提出するもので、「読売新聞」の「月曜附録」に掲載されるものであった。この「附録」は抱月がその責任者だった。その第一回は明治三十四年四月二十二日の同紙に「鏡花の註文帳を評す」として発表され、正宗は白鳥子という号を使った。それ以後彼は白鳥なる号によって終生売文をすることとなる。

近松秋江の「文壇三十年」に次のような挿話がある。場面は明治三十四年で、正宗忠夫が数え年二十三歳の時のことである。師の島村抱月はこのとき数え年で三十一歳である。

「はじめて抱月氏の宅に会合して、いよいよ吾々も評論の筆を執って合評をしようとなつた時、抱月氏は、吾々を顧みて、一つ諸君の号を付けなければならぬ。何としようといつて吾々の意向を訊うた。他の二人は、前から、何かしら文章や詩を作っていた人間で、もうちゃんと号があつた。抱月氏曰く、可矣。

『それから君は?』と正宗忠夫君に向かって訊うた。

『僕はそんなものは、まだないんです。白鳥が好きなんです。』と、口ごもりながらいった。

『可矣、じゃ正宗白鳥としよう。いい名だ。正宗白鳥』と抱月氏は口の中でいいながらさらさらと紙に書いた。

卒業後正宗は母校の出版部に勤めて、校外生のための講

義録などの編纂に当たることとなった。そのかたわら彼は翻訳をしたり、童話のダイジェストをしたりして、小づかい稼ぎをした。だが少し遅れて同じ出版部に勤めるようになった近松秋江が怠惰で、仕事をみな正宗に押しつけ、愚痴ばかり言っているのに腹を立て、一年にもならぬうちに正宗はこの仕事を放棄した。

その次に、明治三十六年六月、彼が職を得たのは「読売新聞」である。この新聞社に、正宗白鳥は明治四十三年までの七年間在職することになり、その間に小説を書いて作家としての地位を得た。彼がこの新聞ではじめ担当したのは、美術、文芸、教育についてのニュースを書くことであった。白鳥は大変演劇が好きだったので積極的に演劇批評を書くようになった。彼は剛直で芸人の世界の人情や金銭のやりとりの習慣に屈せず、妥協のない批評をしたので、いろいろな抵抗に直面したが、その批評の筆を曲げることがなかった。

その社には先輩の記者として上司かみつき小剣がいた。上司は本名を延貴と言ひ、堺利彦の指導を受けて、多少社会主義思想を抱いていたが、正宗白鳥より五つほど年上であった。上司は記者として部長級のよい地位にいたが、白鳥が入社して小説を書き出したのに刺戟されて、同様に小説を書き、地味ながらも大正期では一個の作家としての地位を確保するに至った。

はじめ正宗白鳥は、もと島村抱月の作り出した月曜附録、

のちに日曜附録となった欄を担当したことから、文士たちと接触するようになった。岩野泡鳴などは金に困ると、しばしば随筆や評論の類を持ち込んで金に代えた。白鳥は早くから田山花袋と交際があった。七つも年上のこの先輩の家を訪ねて、玄関でただ「正宗」と言っただけ立っているというような態度で、傲岸な青年と見られていた。

花袋を通して国木田独歩を知り、明治三十八年に出た「独歩集」の諸作を読んだことが、正宗白鳥をして小説家ならしめたのである。前に述べたことだが、彼は「万朝報」の懸賞小説に応募して落選したとき、自分は小説家の柄でないと思った。明治三十年代の硯友社中心時代には、その美文風の文体、また義理人情を中心とする話の展開の仕方などを巧みに書けない作家は、小説家として売文生活をするのができなかった。

この文の冒頭に書いたように、独歩、花袋、秋声などは、そういう文壇小説の作家としての落第生であった。その硯友社風の書き方が、明治三十六年の尾崎紅葉の死とともに変わりはじめたのである。一時は小杉天外という半通俗の社会的視野を持つ作家、それから紅葉の弟子の小栗風葉などが文壇の指導者となりそうに見えたが、それらの作家はいずれも本場の新しい精神を持っていなかった。

そして明治三十八年、一介の英文学者にすぎなかった夏目漱石が「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を書きはじめ、その年の七月、国木田独歩がその短篇集をまとめて

「独歩集」を出したとき、そして翌三十九年に「運命」が、島崎藤村の「破戒」と前後して出たとき、日本の近代文学に真の意味での新時代が発足したのである。国木田独歩の小説は、それまでの小説らしい趣向のない、ただの感想文のようなものだった。たとえば「春の鳥」、「空知川の岸辺」、「牛肉と馬鈴薯」のような作品は、ほとんど隨筆と言うべきものであった。しかし、その時の考えで小説らしいというのは、すでに新しきものを見失ったマナリズムに堕したものであった。そして小説らしい小説を書けない、ということが、その時代の陳腐になった形式を踏襲できない真剣な思考法を身につけた人であることの証拠であった。

まさにそのような変革期がこのとき、近代の日本に現われていたのである。夏目漱石について言っても、「吾輩は猫である」のような作品もまた、今までの日本では小説として考えられぬものであった。時は日露戦争の最中であり、農薬国としての日本がより科学的な工業社会の性格に移り変わろうとはじめてた変革期であった。

小説をいかに書くかという問題ではなく、人間とは何か、という問題に自らぶつかっている人間のみが、そのような時に本当の作品を書くことができる。そして独歩と漱石という二人の先駆者は、それぞれ自分に「人間とは何か」という質問を提出していたのである。

正宗白鳥は、その「下手」だと言われた独歩の書くものが小説であるなら、自分も小説を書くことができる、と考え

た。文章の下手な、しかし真剣な何ものかを描いてみる、ということの中に芸術が存在することを白鳥は理解した。この当時の白鳥は女遊びもし、信仰を放棄している人間であった。しかし彼の内部にある「真剣なもの」は、キリスト教を信仰した時代に、彼の内部に形成され、醗酵したのであった、と言わねばならない。

白鳥の担当する「読売」の「日曜附録」は、二頁にわたって文芸、美術などの記事や評論をのせたが、白鳥が後藤宙外を知ったのも、この欄の担当者としてであった。後藤宙外は秋田県の産で、当時の代表的な文芸雑誌「新小説」の主幹であった。彼は硯友社に属したわけではないが尾崎紅葉と親しかった。それゆえ紅葉の死後、泉鏡花、柳川春葉、小栗風葉などはこの雑誌に籍をおき、この雑誌が、文壇に硯友社色を保持する拠り所であり、文壇の正統的な発



大正15年2月 47歳

表機関であった。

明治三十七年の秋、後藤宙外は正宗白鳥に「新小説」に小説を書くことをすすめた。もし白鳥が「読売」の「日曜附録」欄の担当者でなかったら後藤宙外が、全く素人の白鳥に小説を書かせるわけはないと推定される。正宗白鳥は終生、自分は小説を書く気がなかったのだが、後藤宙外が書いてみると言ったから書いたのだ、そのうち評判になって作家の地位が出来たのだ、とくり返して書いていた。あたかも自ら作家たることに執着したことがないかのよう。そして後藤宙外がなぜ彼を選んで小説をたのんだかについては説明したことがなかった。

その二三年後に、北海道から上京した石川啄木が小説を熱心に書いて何度とその発表を後藤宙外にたのんだのに、宙外は冷酷にそれを「新小説」に載せることを拒否しつづけた。白鳥もまたその下宿を訪ねてきた啄木に冷たかった。そのことを考えれば、白鳥に小説を書かせたのは、宙外から持ち出した一種の取り引きであったと言ってもいいように思う。

ともかく正宗白鳥は数え年二十六歳の明治三十七年十一月「新小説」に「寂莫」という小説を発表して二十余円の原稿料を得、その時の記念に蒲団を新調したと書いている。この小説は一人の画家の野心と絶望感を描いたものであるが、いかにも素人の試作という粗雑さがあったので、人の注目は引かなかった。

明治三十八年は前述のように明治の文学革新のはじまった年である。この年、柳田国男が中心になって龍土会という文学談話会が麻布の龍土軒を主な会場として毎月開かれるようになった。そこに柳田、花袋、独歩、蒲原有明、岩野泡鳴、小栗風葉、小山内薫などがよく出席し、やがてこの会は自然主義文学の一つの中心になる。そこに白鳥はよく出席した。

さらにこの年、正宗白鳥はxyなる匿名で「文科大学生生活」を出版した。これは、彼が東大の文科大学（のちの文学部）の教師たちの評判記を「読売」に載せたのを、まとめて出版したものであり、白鳥の名誉になる仕事ではない。しかしこの記事の中で白鳥は、前々年に小泉八雲が東大をやめて早稲田に移ってから、東大の英文科の講師として並立っていた夏目漱石と上田敏とを較べて論じ、漱石を賞讃し、上田敏には辛い評価をした。このことが後まで尾を引いて、東大生の間での上田敏の消極的な評判に関係するところがあったのではないかと推定される。

明治三十八年には一作もなく、三十九年になって彼は四篇の短篇小説を次々と発表するが、出来のよいものはなく、また評判にもならなかった。ところが四十年の二月、「趣味」に発表した「塵埃」が、新聞社の校正係の希望も張り合いもない生活を描いた短篇で、新しい作風の佳作と言われた。人生の無意義、無理想ということに力点を置くのがこの時の流行であった。その潮に乗って、正宗白鳥は、は

じめて小説らしい小説を、一つの場面を描くことによってまとめたのであった。

この作品が好評だったことが白鳥を勇気づけたらしく、そのあと数篇の小説を書き、明治四十年九月には、十二篇の短篇を集めて「紅塵」という小説集を出版した。この本の「紅塵」なる題は、その中の代表作の「塵埃」というのでは地味にすぎるとして、ちょっと調子を変えた名であった。彼の小説家としての名声を決定的にしたのは、四十一年の一月から四月まで「早稲田文学」に連載して、中絶した形で終わったところの「何処へ」である。これは、宗教、家庭、立身出世、道徳、友情などの世俗的な権威あるイメージのことごとくを冷笑し、そういうものと違うところに自分の理想を見出し得ない、理想を失った

れた一種のヒロイズムを裏面に持った虚無主義の小説であった。

この作品が正宗白鳥の終生の姿勢を決定した、と言っているようにある。白鳥はその描く対象に感動せず、価値を認めず、投げやりに取りあげ、しばらくそれを調べてみるが結局つまらぬものばかりだ、というふうに投げ出す。この世には信仰とか学問とか恋愛というような、人間を夢中にさせるものがあるけれども、自分が近づいてその内容をしらべ、その味をためしてみると、結局どれも決定的なものはない。この程度のものが人生の大事なのであろうか、という懷疑と不信の念によって、それから立ちのく。

それが正宗白鳥の終生のものの書き方の特徴となった。彼は、その冷淡な心をもって、社会、人生のあらゆるものに首をつつ込み、どこへでも赴いて見聞する。結局これもまたつまらぬ事であった、という結論に達するのがきまりである。これは正宗白鳥の生き方でもあった。彼は老境に入ってから、大して関心のない会合などによく顔を出し、全く感動しない表情で人々の言葉に耳を傾け、その人々の表情に見入っていた。その点を突いて、戦後になってから太宰治が正宗白鳥は要するにジャーナリストにすぎない、と批判した。この批判はかなり不快な念を白鳥に与えたようであった。

私の考えによれば、彼はものを書いて売るためには何かを見たり、聞いたり、読んだりしなければならなかったの

死なねば

生きぬ

白鳥

昭和十一年
三月九日

青年の心を描いたものである。信仰から脱落した正宗白鳥その人の心理の反映であったから、かなり力のこもった作品となった。これは、それまでの彼の小説の多くが描写であったのに較べると、はつきりした作者からの社会通念に対する批判、反撥、嫌悪感などが描か

説家と見られ、虚無主義者と言われた。

正宗白鳥は明治四十三年の六月「読売新聞」を退社するが、そのころちょうど幸徳秋水その他の人々がいわゆる大逆事件で逮捕された。幸徳秋水は一種の無政府主義を抱いていたが、虚無主義というのもその同類の思想と見なされて、一時は正宗白鳥も警戒され、私服の尾行がついた。

この年の十月、白鳥は「微光」というやや長い短篇小説を「中央公論」に発表して、非常な好評を得た。給料生活者のことしか知らないと言われていた白鳥がこの小説においてはじめて女を描き出したと批評されたのである。この小説が出る半年前の三月に、近松秋江は「別れたる妻に送る手紙」という小説を「早稲田文学」に発表しはじめ、七月号まで書きつづけた。これは秋江の生活に即した作品で、彼のもとから逃げ出した妻に送る手紙の形で、その近況を書きしるした作品であった。

近松秋江の妻はますという名で、もと貸席の女中であつた。秋江の稼ぎが少ないことが原因で素人下宿などをしていううちに、そこへ置いた大学生と親しくなつて、まずは行方をくらました。秋江は一人になつて淋しいまま時時女を買ったが、日本橋の水天宮の近くに馴染の私娼があつた。そこは白鳥や上司小剣、水口薇陽など仲間も連れ立って訪ねて行く家であつた。近松秋江はその私娼が気に入つて、その女のことを白鳥に話した。

である。晩年まで彼は熱心な傍観者であり、熱心な読書家であつた。その点は好奇心の強い人と言われたが、太宰の言うように新聞社に籍を置いている間にこの傍観者の姿勢が出来たのは事実であらう。しかし彼がたいいていの事を瑣末扱いする原因は、彼が棄教者であることから来ているように思われる。自分は信仰ですら棄て去つたものである。まして世間の成功、金銭、名声、恋愛の執着など、要するに瑣末事ではないか、というのが彼の生に対する根本態度である。「何処へ」を書いた時の彼の心に湧いた、より高い理想を求める心は、ほとんどそのまま求道の心であつた、と言つてよい。

「何処へ」は当時早稲田大学にいた文学青年たち、たとえば広津和郎や青野季吉のような後輩に深い影響を及ぼしたものであり、白鳥もまたその方向への心の動きが小説として強い印象を生むことに気がついた。そして彼の中には、真心によつて、達し得ざる理想を求める心と、小説として人に与えるヒロイズムの喜びとが二重に焼きつけられ、そこに白鳥的な人生の感じ方のパターンが成立した。

あれもつまらぬ、これも面白くない、と言うニヒリズムは、その当時の日本の自然主義に一般的にあつた無感動の傾向と結びついて、正宗白鳥もまた自然主義作家の一人として扱われたのであつた。日本の自然主義文学は、実にさまざまな傾向の作家を一括したものであつたが、正宗白鳥は、その中で最も新しい、そして冷徹な傾向を代表する小

白鳥は秋江を軽く見ていた。その上秋江はその頃、「文壇無駄話」という随筆を「読売」に匿名で連載していて、その稿料がほとんど唯一の収入ようになっていた。女を買いに行く時など、その稿料を白鳥に出させてその金を持って行くというふうであった。

白鳥はあるとき、一人で別な家に行って、その女を呼んで買った。これは友人の秋江に対する裏切りであった。そのあとで秋江は、それを知らず、その女と泊まったとき、金がなかったのので、俵夫に手紙を持たせて読売新聞社へ使いにやって、係りの白鳥から稿料を前借りしようとした。すると白鳥は「その金、渡し難し。必ず原稿引換えを要す。」云々という返事を持たせて俵夫を帰らせた。「その



昭和34年 曾野綾子さんと

金」という言い方に、「その女のために使う金」という意味を見てとって秋江は立腹した。そののちに白鳥は、水口薇陽と秋江と三人で雑談しているとき、その女の噂が出ると、「あの女は寝顔のいい女だ」と言って、自分もまたその女を買っていることを秋江に分か

るように仕向けた。その時の白鳥の態度は秋江をひどく傷つけた。秋江は白鳥のことを「悪魔のような人間だ」と小説「別れたる妻に送る手紙」の中に書いた。

「何処へ」を書いたりしたころの白鳥は、たしかに悪魔的なところがあり、秋江の方にはまた苦境にあって愚痴を言いながら、その状態を噛みしめて味わうようなマゾヒズムの傾向があった。その上白鳥は、その女に別な場所の家を借りて住まわせておいたから、その一時期白鳥はその女を秋江から取り上げて囲っているような形になった。もっともその女は、囲われてじっとしているような女性でなく、自らその束縛を破って売色の巷へ戻った。

この女性を白鳥の立場から描き出したのが、明治四十三年十月に発表した「微光」である。白鳥はこの時期女の生活に立ち入っているいろいろな経験知識を持っていたので、この小説に描かれたお国という女に生彩があったのは当然であった。

その翌年の明治四十四年の四月、白鳥は数え年三十四歳で、甲府出身の清水つねという二十歳の女性と結婚した。それは中村吉蔵夫婦の世話によるものであった。この甲府の女学校を一番で卒業したという初心で可愛らしい嫁に対して、白鳥の態度はそっけないものであった。それは彼がその結婚を郷里の父に知らせてやった手紙からもうかがうことができる。その手紙は後藤亮の「正宗白鳥」に引用されているところによると、次のようなものであった。

「拝啓

七日の夜結婚仕候

父は甲州甲府柳町通

父 清水徳兵衛

にて候

妻の名は つね

右お知らせ申候」

結婚後一週間もすると、白鳥は妻をうちに置いたまま、独身時代によく芸者を買いに行った待合に行つて泊まつて帰つたりした。

その上彼は、結婚後四カ月目の明治四十四年の七月「泥人形」という小説を「早稲田文学」に発表した。この小説は自分の結婚を描いたものであるが、新妻のつねを全く愛情というものなしに扱う自分の冷酷さ無関心さをわざわざ目立つように書いた小説であつた。すなわち「何処へ」の手法で現実の自分の新妻を描いたのである。当時早稲田大学の学生で、正宗白鳥を大変尊敬していた広津和郎は、この小説を読んですっかり不愉快になつた。広津はそれから五年ほど後の大正五年、その時の印象を「あの罪のない細君をあんなに残酷に皮肉に取り扱う主人公の気持には、ムカムカするほど腹が立ちました」と述べたほどであつた。「何処へ」において見せたところの白鳥のニル・アドミラリの態度、いかなるものにも権威や神聖さや美しさを認めまいとする白鳥の態度は、ある意味ではその本心であるが、

ある意味では本心と区別することのできない白鳥流の気取りなのであり、この時新妻のつねはその気取りの犠牲になつたようなものであつた。

この作品はいかに白鳥らしいものとして好評であつた。しかしそれは妻の心によほど深い傷を結果として与えたと推定される節がある。青野季吉もまた若い時からの白鳥の愛読者であつたが、「白鳥はあの『泥人形』のあと、その細君を直接に描いた作品はその後にはない」と述べていた。また白鳥自身もそれから十数年のちには妻について次のように書いている。

「人は生活の上で誰の感化をよく受けているか、と訊かれる時、えらそうな人間の名を挙げたがるものだが、本当は五十年と同棲している妻（あるいはそれに匹敵する女性）から受けた感化が最も重要なものではなからうか。感化の有様を微細に見分けることは困難だが、誰でも本当に自己批判をする時には、それは軽視されないことだと思ふ。仮りに、同棲者に対して憎悪を覚えているとしても、憎悪しているがために一層影響を蒙るのである。同棲者が柔順でありあるいは痴鈍であつたにしても、そのために感化力が乏しいとは云えないかも知れない」と「文壇的自叙伝」で言っている。

白鳥の八十三年にわたる長い生涯は、戦争のち十七年目の昭和三十七年まで続くのであるが、彼は妻を大事にした。その生活には何の波瀾も形の上では起きなかつた。昭